

< 実践事例 国分寺市立第七小学校 >

1. 取組・活動名

「オリンピック・パラリンピック教育 ～障害者理解の促進～」

2. 取組・活動のねらい

- 障害のある友達との交流から共生の心を育てる。
- パラスリートとの直接交流を通して、障害理解を促進する。
 - ・ゴールボールパラリンピアンによる講演及び体験学習（全校）・給食交流（6年生）
 - ・パラ水泳アスリートによる講演及び体験学習（全校）・給食交流（4・5年生）

3. 教育課程上の教科名・時数

「体育、特別活動・4時間（各学年）」

4. 実施上の工夫

- ・本校の特別支援学級について知り、自分自身との違いや共通点に気付かせる。
- ・本校のオリンピック・パラリンピック教育における重要な事項として、全学年がその発達段階に応じて、体験学習や夢に向かって努力を重ねている講話を受けられる場面を設定した。
- ・障害者スポーツの「ゴールボール」や「パラ水泳」について、児童が体験・交流し、障害者スポーツを知るとともに、様々な努力や工夫についても理解を深められるようにした。

5. 本取組・活動の内容



「き・こ・う集会（障害理解教育）」

- ・隣の友達と得意なこと、苦手なことについて話し合う交流を通して、一人一人が同じでないことを理解した。それと同じように、けやき学級（知的障害固定学級）やこすもす教室（特別支援教室）の友達とは、学校での学び方が違う事を理解するとともに、一生懸命頑張っていることは共通しているという理解を深めた。
- ・かわり合いで大切な合言葉「き・こ・う」とは、自分で気付いて（き）、声をかけ（こ）、動く（う）ことであり、「思い」は見えないし、聞こえないものだから、「き・こ・う」で見えて聞こえる「思いやり」にしようという考え方を共通理解した。



「ゴールボールパラリンピアンとの交流」

- ・パラリンピアンが専用ボールを掲げ、重いか重くないかのクイズから交流がスタートした。「重いと思う人は？」と問われて黙って挙手する児童に、それではわからないから声や拍手で教えてくださいとおそわるなど、大切なコミュニケーションの在り方について学んだ。
- ・児童同士の専用ボールを使った「キャッチ&スロー」、「3対3のミニゲーム」、そして「アスリートに挑戦コーナー」で親しむことができた。
- ・パラリンピアンから「2020年金メダルへの大きな夢がある。そのために、今日も一生懸命、練習を取り組むので、たくさん応援してほしい」という声に、大きな拍手が湧いた。



「パラ水泳アスリートとの交流」

- ・5・6年生は、100mバタフライ、背泳、自由形で国内外の大会に出場しているパラアスリートの泳ぎを水中で目視し、抵抗の少ない水中姿勢やまっすぐ泳ぐための一連の動きを間近に見ることで、無駄な力を抜くことの大切さを実感できた。
- ・「パラ水泳バタフライの泳法基準が変更され、自分にとっては不利な条件となったけれど、これまでの自分を信じて対応していく」というアスリートの話から、挑戦を続ける姿を学んだ。
- ・知的障害学級では、事前学習として教室での自己紹介を一人ずつ行い、親交を深めた。

6. 成果

- ・全校児童による直接交流に重点を置き、学年単位で体験的な学習を実施したことで、パラリンピックへの関心が高まり、障害者や障害者スポーツへの理解が深まった。

【児童の感想から】

- ・心の中で助けようと思っていても行動に移さないと何も起こらない。
- ・行動するには勇気がいるけれど、少しずつできるようにしていきたい。
- ・学ぶ場所は関係なく、その人自身が真剣にやっているかどうか大切なのだ。
- ・給食交流で、練習内容やキャプテンとして大事にしていることを聞くことができた。
- ・目標は金メダルということを知り、全力を挙げて、自分たちの夢に向かっていくことがわかった。
- ・けのびでは頭を上げないようにとアドバイスされたのでそのことを注意してやってみたら、前と比べてとても速くなった。
- ・ぼくは、東京2020でオリンピックだけでなく、パラリンピックも見ようと思った。